



慶應義塾大学ビジネス・スクール

赤井電機株式会社

1995年初め、赤井電機株式会社は、効果的な再建策を検討していた。特に、1994年10月以降は、赤井電機では、香港のセミ・テック（グローバル）株式会社との提携の可能性について検討を続けていた。10

赤井電機の概要

1946年、赤井三郎氏（1916年生）は東京に赤井電機を設立して、養父に名目的に社長を依頼して事業を始めた。¹ 赤井三郎氏は、資本金払い込み用の資金の必要性から、三菱銀行羽田支店からの借入を申し込んだ、三菱銀行は、赤井三郎氏の旧円封鎖された定期預金を担保にして15千円の融資を行った。これを契機として、赤井電機と三菱銀行との取引関係が始まった。² 15

赤井電機は開業当初は自動車の電気部品、磁気部品、ラジオ部品、小型モーター等の製造を細々と続けていた。1953年、赤井三郎氏は社長に就任した。赤井電機の飛躍は、小型モーターの技術を基礎に開発したテープレコーダーの販売から始まった。すなわち、1954年、赤井電機の技術者は、日本で最初のテープ・レコーダーを開発し、生産を開始した。1956年、赤井電機は、世界で初めて、縦型テープレコーダーキットの販売を開始した。さらに、1961年、赤井電機は、自社のテープレコーダーを用いてランゲージラボラトリー事業を開始した。当時、赤井電機は、製品をテープレコーダー1本に絞るとともに高級化25

¹ 赤井電機株式会社は、赤井三郎氏の養父が1929年に東京で設立した赤井プレス工業にまで遡ることができる。

² 梶原一明、「赤井電機はなぜ“急降下”したのか」宝石（1983年2月），p. 153

このケースは、慶應義塾大学大学院経営研究科教授の鈴木貞彦が公表資料に基づいて作成したものである。このケースは経営の巧拙を例示するためのものではない。（1996年9月）

Copyright © 1996 by Professor Sadahiko Suzuki of Graduate School of Business Administration, Keio University, Japan. No part of this publication maybe reproduced, stored in a retrieval system, used in a spreadsheet, or transmitted in any form or by any means - electronic, mechanical, photocopying, recording, or otherwise - without the permission of the author.
(Prepared in September 1996)